

どんなにか淋しかったことでしょう、今は引揚者と白い目でみる人もあまりいませんが、あの当時は何かと引揚者とそういう目で見られ悲しいときもありました。

私達兄妹は十三人でしたが、今は六人になりました。

両親も亡くなり母は今年で十七回忌になります妹達と樺太をいつも思い出しております。

元氣だったらまだまだ楽をさせてやりたかったと思ひ残念でなりません。特に母は苦勞ばかりで私達子供のために頑張つて本当にありがとう、私は三十八年間看護婦として今日まで頑張りました、今年で定年を迎えました、母のように、これからも頑張りたいと思つております。

沈没した小笠原丸に家族を乗せて

北海道 須藤 昭 一

戦争末期の昭和二十年、あこがれの海軍にはいるべく、海軍志願の手続きを取った。第一志望、航空兵。第

二志望、一般水兵。第三志望、機関兵として願書を提出した。

戦局急を告げていた七月始、第一次試験が八月二十四日との通知を受けた。母は強く反対したが、十三歳で志願していた人が何人もおり十六歳で早くはないと、私は耳をかさなかつた。しかし八月十五日の終戦とソ連軍真岡上陸との報に、予想もしなかつただけに衝撃を受けた。

さらに特定の男子及び全部の婦女子に早急に引揚げるよう通達があつた。我が家も引揚げ先が決定するまで時間がかかつた。私は父と残り母妹第四人の六人が母の実家の青森県に決まつた。持てるだけ背負えるだけの荷物をまとめ追われるように大泊港へ向つた。

八月十八日の大泊新埠頭は晴天で暑かつた。母達は見知らぬ大勢の人と引揚船を待った。岸壁には泰東丸が着岸していた。出港に時間があるのか、乗組員の一人が海中に飛びこみ水泳を楽しんでいた。大泊旧埠頭には間断なく艦船が出入港をくり返し稚内上陸の引揚者を運んでいた。新埠頭には何時引揚船が入港するのか誰も知ら

されていない。

八月二十日も暑い。港まで十二キロメートルと近いので食糧を運びつづけた、母が葡萄糖買って来て欲しいと言いつつ二十円で、一貫目買える、とのことで食糧運んでくるとき持つてくることを約し別れた。大泊港に通じる道路、線路の両側には、新品同様の自転車があちこちに捨てられていた。拾う人もいない意外な光景であった。

夜十時過ぎ母の待つ埠頭について見ると、泣き叫ぶ女の声、怒号が入りまじり、広大な埠頭は異様などよめきを呈していた。乗船が始まったことを直観した。

遅かった。家族の者に会いたかった。母に葡萄糖を渡せなかったのをくやんだ。

混乱の中、母達に付添っていた母の弟にあたる梅木さんに会った。「皆小笠原丸に乗ったもうそばにいけない」との話で残念だったが我が家に引き返した。二十四時〇分だった。

大泊の町も、ソ連軍がくるとの情報で人々の思考も複雑で混乱していた。大泊駅には引揚者の荷物が何十か所にも、山のように積まれていた。二十三日、朝家族のい

ない淋しさを味わい早く引揚げなければ、と思っていた矢先、小笠原丸沈没の話が伝わった。まさに晴天の霹靂、確かめようにも方法がなく、父とともに思案にくれた「密航より方法がない」と父は言った。部落の人も賛成し準備にかかった。九月初めの頃であった、ソ連兵もやってくるようになり、民家を物色し、目ぼしい物を持ち去り「サツケー」「ダワイ」「ウイスキ」「ダワイ」ピン入りの物を見ると要求した。何の理由もなく、部落の人が三人射殺された。隣部落の十二人が是非行動を共にしたいとのことで、私達は男ばかりの十四人乗りで、舟幅十一メートル大型の和船である。

ソ連機の金属音におびえ、ソ連兵に注意しながら舟を仕立てた。

九月二十日午後六時、日没を待って出港となった。雨降りの最悪の日である。部落で山田さんだけ密航に加わらずなぜ残っていた。我が家とも永久の別れであるが、特別な感傷にひたっている暇はなかった。

家族の無事を念じ舟を出した。

午後八時三十分頃、留多加と思われる地点の陸地二か

所から砲撃を受けたが、大事にいたらなかつた。

九月二十一日未明、能登呂岬の内側で北寄り村マゴツエに着き、稚内向け舟を出す機会を待った。亜庭湾内はソ連警備艇、陸地はソ連兵の巡回、その目を逃れ家族の安否を気づかない脱出出来ないもどかしさにいらだつた。

何時の間にか密航する舟が、十六隻になっていた。

逃げるぞ、父の重苦しい声に急に力がわいた。くらやみにまぎれ舟を出した。

十月十三日であった。無風であったのが能登呂岬二丈岩燈台を通過する頃、大暴風に見舞われ、二本の柱のうち船首の柱が折れた。十四日朝になり舵が半分ちぎれている事がわかつた。さらに風の方向が悪く帆走出来ず、七丁の鱧をこいだ。樺太はすぐそこである、皆あせつた。辛い風が北寄りになった。皆小躍りして喜んだ。

「もう稚内はむりだ枝幸に向ける」父の言葉に笑顔でうなずき、枝幸港向け帆走した。午後四時頃枝幸近くになったとき、帰港中の底引き船に曳航され港にはいった。十四人の目がぬれた。

よろこびあうのもそこそこに、電話をかけ家族の無事

を確かめようとしていた父の言葉から最悪の事態が察せられた。万事休す。

家族の者も、親類の者も、誰一人日本に着いていなかった。それだけを念じ、祈り続けてきたものを、運命の過酷さに泣いた。戦が終わったのにこんなことがあるのだろうか。しかるべき筋からの命令で、引揚げさせたのに、この悲しみ苦しみをどこに訴え、誰にぶつけたら良いのか。災難にあった者、残った者、むざんである。

通信省所属、小笠原丸八月二十二日午前四時増毛町別荘沖で国籍不明の潜水艦に攻撃され沈没した。生存者は五十数人とのこと。となり村二ノ沢の村瀬さんの奥さんが救助されていた。数日後別荘海岸に打ち上げられていた。小笠原丸救命ボートのそばに立っていた。

進学海軍志願等でわがままを通した自分を心から詫び、弟妹にも無情に過ぎて来たことを涙ながらに詫びた。

子供達をきびしくしつけた父も無念であつたろう。とめどもなく、あふれる涙を見せまいと、断腸の思いで沖を見つめ何時までも立ち去ろうとしなかつた。